

関西地区における 臨床研修指定病院の図書室について ～アンケートの結果を考える～

国立京都病院 小田中 徹也

国立大阪病院 福味 美津子

星ヶ丘厚生年金病院 川原 佳子

病院間において較差の著しい病院図書室についても、臨床研修指定病院に対しては昭和49年9月、医師研修審議会から指定規準が示され、その中で図書室についても一定の望ましい水準が示された。¹

私共は昭和54年1月、関西地区（三重、福井、島根も含む）全域の臨床研修指定病院と若干の同規模の総合病院へ、図書室の実態についてアンケート調査を行った。依頼先は〔表1〕で、調査項目は〔表2〕である。

〔表1〕 臨床研修指定病院図書室(関西地区)の実態アンケート依頼先

大津赤十字病院・国立京都病院・京都市立病院・京都第二赤十字病院・国立大阪病院・大阪通信病院・大阪府立成人病センター・大阪赤十字病院・大阪厚生年金病院・住友病院・大阪回生病院・日生病院・社保神戸中央病院・島根県立中央病院・京都第一赤十字病院・市立堺病院・大阪警察病院・北野病院・大手前病院・

大阪府立病院・松下病院・神戸市立中央病院・県立尼崎病院・天理よろづ相談所病院・福井県立病院・大阪鉄道病院・大阪労災病院・大阪市立城北市民病院・総合病院神鋼病院・和歌山赤十字病院・三重県立総合塩浜病院・三重県厚生連松坂中央総合病院

星ヶ丘厚生年金病院・松下電器健康管理センター・奈良県立病院・兵庫県立塚口病院・姫路赤十字病院・県立加古川病院・高山赤十字病院・関西電力病院

✕

アンケート対象総数：40%
(非指定病院：8)

総回収率：60%
指定：65.6% 非指定：37.5%

国立系：3 公立系：8(1)
日赤系：3(1) 医療団体系：3(1)
公益(医療法人)系：4

[表 2] アンケート項目

病院名	所在地	設置主体
ベット数	総職員数	医師数
研修医(レジデントも含む)数	看護	
その他		
A 図書室組織(図書委員会)		
B 図書室担当者		
(1) 数 (2) 専門性 (3) 身分		
C 予算		
(1) 予算計上額 (2) 総支出額		
D 資料		
1) 蔵書数(和・洋)		
2) 逐次刊行物(和・洋)		
3) 年間受入図書冊数		
4) 二次資料の種類		
E 機能		
1) 利用サービスの種類		
2) 整理		
F 設備		
1) 図書室の院内での独立性		
2) 面積		
3) 機材		
4) 司書の事務室		
5) 閲覧室		
6) その他		

これらのアンケート集計から、ベット数と総職員数及び図書予算との相関関係をみたのが [表 3] と [表 4] である。ベット数と総職員数の相関係数は 0.427 で、やや関係はない方に近いがこの調査結果からだけでは判断できない。ベット数と図書予算との相関係数は -0.142 で、このことからベット数の増加が必ずしも図書予算の増加には比例していないといえよう。この結果はこれまでの病院

図書室の実態調査報告^{2,3,4}とも一致している。

以上のことから、図書室の規模及び質的な充実を病院の規模(ベット数)には還元出来ないと考え、設置主体別に病院図書室の実態を分析してみた。設置主体をカテゴリー化するには困難な点もあったが、指定病院を5つのカテゴリー(国立系・公立系・日赤系・医療団体系・公益-医療-法人系)に分け、非指定病院を一つのカテゴリーとする計6カテゴリー別に図書室の実態を、次に述べる6要素から描いてみた。

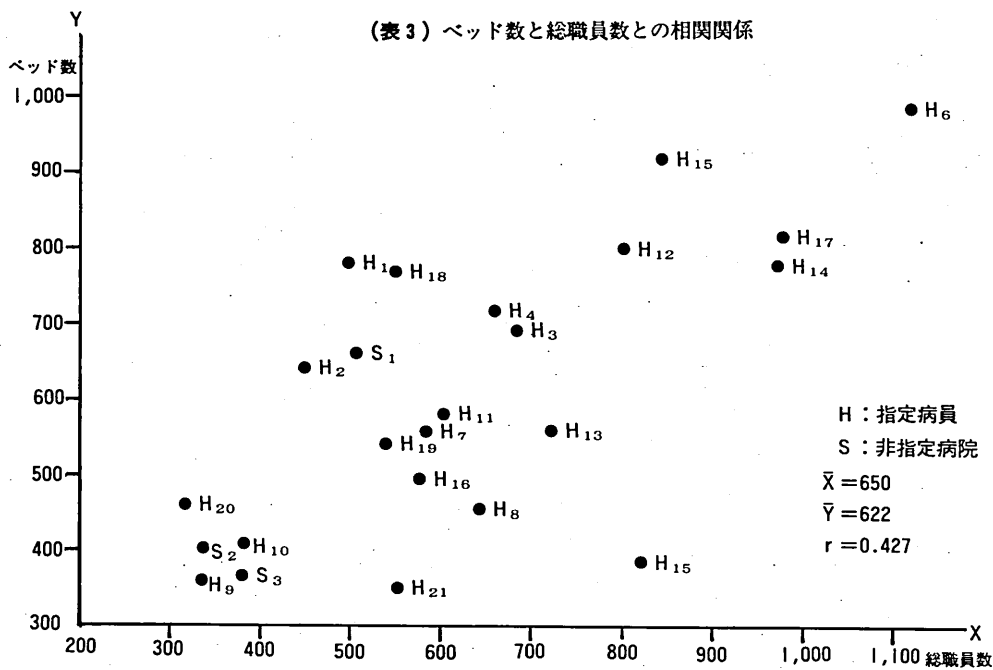
6要素とは、1) 利用対象としての研修医数、2) 資料提供者としての図書室担当者数、3) 図書予算、4) 和・洋タイトル数、5) 図書室面積、6) 独立した部屋、閲覧室、事務室などの設備率の6つである。これらを各カテゴリー別にクモの巣グラフにして、各病院図書室の特徴を考えてみた。このグラフにおいて正六角形の各頂点は、人員数と設置率を除いて、各々全指定病院の平均値であり、人員数は専任かつ正職員で一日勤務者が一人いる状態を最低必要線とした数値であり、設備率は図書室が独立して閲覧室がある状態を、100%とした数値である。

[図 1] の国立系では研修医、設備率、面積に比重が大きく、人員、予算、タイトル数において小さい。特に厚生省関係にそれが顕著である。サービス内容に問題があると思われる。

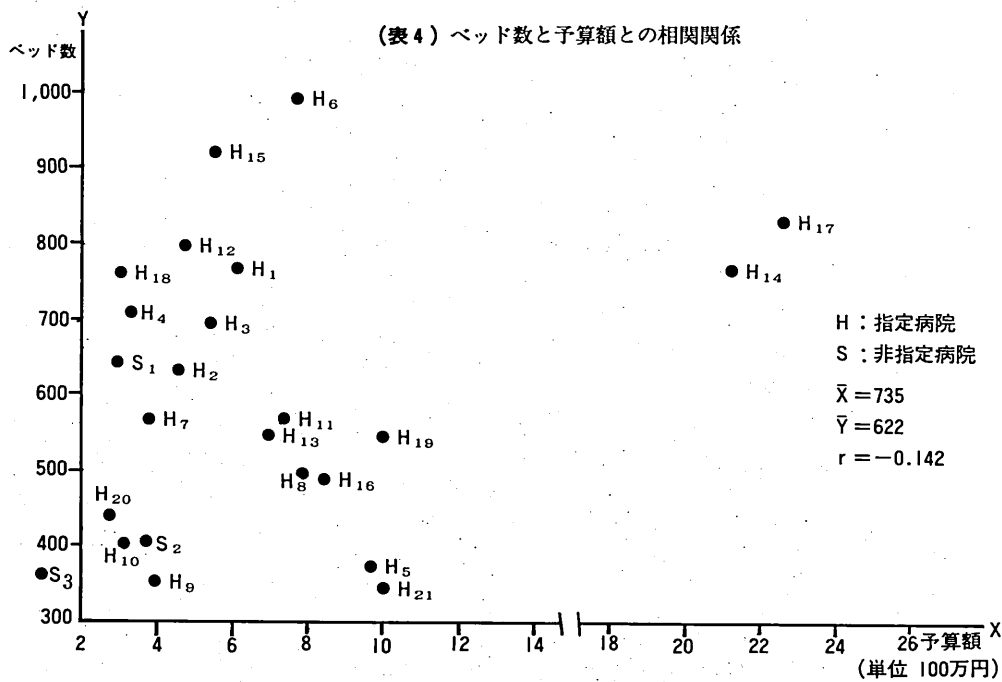
[図 2・3] の公立系の場合には、H₅ や H₁₁ の例外はあるものゝ、1ないし2要素への偏りが大きく、又、極端に小規模な図書室もあり、健全な図書室像とはいえない。

[図 4] の日赤系は各々の規模に応じて素直な図形を示しており、特に人員面での比重が

(表3) ベッド数と総職員数との相関関係



(表4) ベッド数と予算額との相関関係



大きいことがわかる。

[図5]の医療団体は、 H_{10} の人員面を除き全ての面で小規模であり、 H_{10} の人員数も兼務であるなど、他系統に較べ相対的に貧弱といえるだろう。

[図6]の公益(医療)法人系は人員数、予算、タイトル数の面に比重が大きく、スペ

ースは小さくてもサービス内容では充実しているのではないだろうか。

[図7]の非指定病院は、指定病院に較べ、かなり小規模ではあるが人員数、タイトル数、面積の要素では指定病院の平均値にかなり近く、現在の総合病院における図書室のニーズを表わしているといえよう。

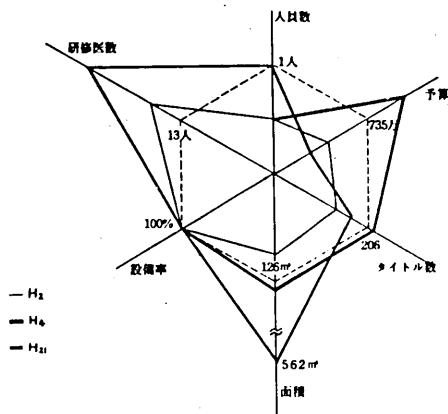


図1 国立系

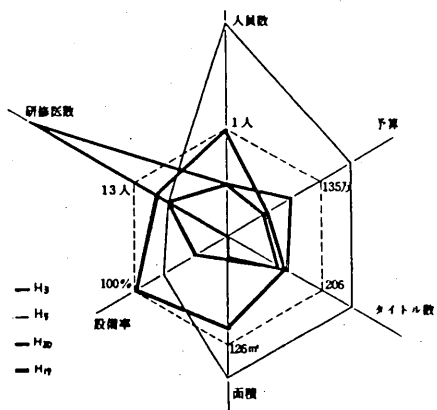


図2 公立系(その1)

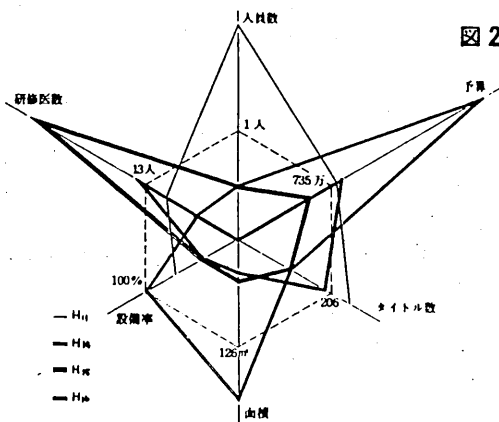


図3 公立系(その2)

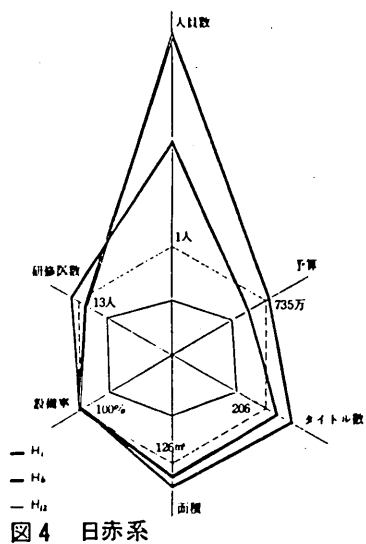


図4 日赤系

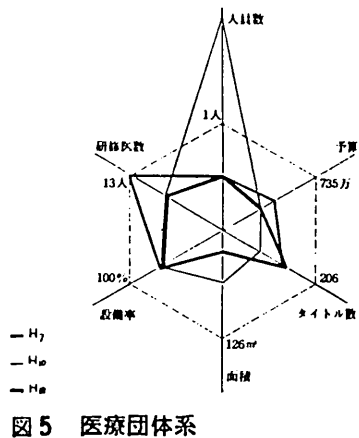


図5 医療団体系

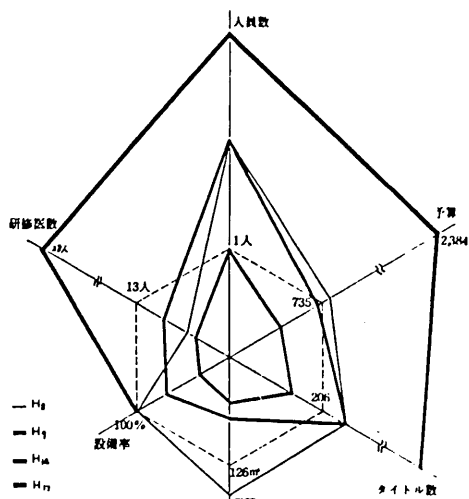


図6 公益(医療)法人系

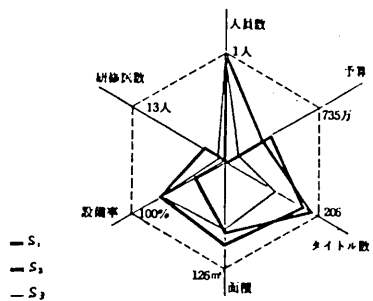


図7 非指定総合病院

以上、設置主体別に病院図書室像をみてきた。国公立系においては利用対象としての研修医は他に較べ多いにもかかわらず、人員、予算、タイトル数において一部の例外を除き、貧弱であるのは大きな問題である。日赤系、公益（医療）法人系は比較的バランスのとれた図書室像であると考えられ、医療団体系は全ての要素において小規模な図書室像を示した。

最後に、指定規準で示された最低予算額年200万円以上も、指定病院では全て満たしており、平均値は735万円であった。また

非指定病院でも1病院のみが200万円以下であった。このことから、提示された規準そのものにも現実の図書室の実態をどれだけ反映されているのかが問題であり、予算、人員、蔵書数、タイトル数などきめこまかな基準が望まれる。

[参考文献]

- 1) 日医新報 No.2631:93-94 1974
- 2) 森 日出男 病院 25(6):50-63 1966
- 3) 近病図協会報 1(1): 1974
- 4) ほすびたる らいぶらりあん 1: 1976

「病院図書室」執筆要項

I 本誌は病院図書室活動およびその関連分野に関する論文を私文により掲載する。

II 原稿

①原稿用紙は400字詰のものを用い、長さは約30枚までとする。

②原稿の様式

イ 標題、著者名、所属機関名を記入し、著者名にはローマ字読みを付記する。

ロ 抄録をつけることとし、論文の要約を原稿用紙1枚(400字)以内に和文で記入する。

ハ本文中の数字、欧文記入については一マス2字とし、又イタリック体やゴチック体を特に指定する場合には、その箇所の下線を引きその旨明記する。

③参考文献の記載要領

イ 雑誌論文

著者の姓名: 論題, 雑誌名, 巻(号): 頁 (はじめとおわり), 出版年の順とする。

※著者名、欧文の場合は姓を先に、名はイニシャルのみ。

※雑誌名の省略、欧文誌は Index Medicus の Abbreviation に準ずる。邦文誌は原則として省略しない。

ロ 単行書

著者または編集者名: 書名, 版次, (翻訳者名), 発行地, 発行所, 出版年, 引用ページ(はじめとおわり)の順とする。

III 校正は原則として編集委員会が行なう。

IV 別刷は当面予定していないので、本誌一部を増呈してこれに代える。

V 稿料は原則として支払わない。

VI 原稿送付先

〒612 京都市伏見区深草向畑町1-1

国立京都病院図書室

T E L 075 - 641 - 9161

以上